知れば知るほど楽しくなる

OTARU HEART JOURNAL

小樽文化遺産ジャーナル

vol.03
DECEMBER.2020

小樽運河の最盛期を象徴する建物、北海製罐小樽工場第3倉庫（大正13年築）
解体方針が示されたが、保存活用検討のため猶予されている。

小樽文化遺産STORY

北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽 —「民の力」で創られ蘇った北の商都—

小樽にたくさんの魅力的な文化遺産があることは市民にも観光客にも知られていますが、個々の遺産のつながり、そして小樽はどんなまちなのかを説明するストーリーは必ずしも明確になっていませんでした。小樽市日本遺産推進協議会では、日本遺産認定を目指し、地域の歴史的魅力や特色をストーリーとしてまとめました。子どもから大人まで、幅広い市民の文化遺産の認知度向上とシビックプライドの醸成、そして文化遺産を活用した観光誘客につなげます。小樽文化遺産ジャーナルでは3回にわたりストーリーを紹介しています。

今回は3回目（最終回）の発行になります。

contents01 運河保存運動を経て、文化と観光の「心臓」のまちへ
contents02 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～
contents03 本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～

小樽文化遺産ジャーナルvol.1～vol.3は小樽文化遺産ポータルに掲載しています▶ http://www.otarubunkaisan.jp

OTARU HEART JOURNAL

ロゴマーク大募集！

「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」では、市内の歴史的文化遺産をみなさんと共有し育てていこうと、そのロゴマークを広く募集します。ぜひご応募ください！

応募要領

「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」をイメージしたシンボルマーク（図）と文字との組み合わせとし、未発表のオリジナル作品に限ります。

応募締切

令和2年12月21日（月）
※消印有効

応募方法

応募用紙にデザインと必要事項を記入し、郵送かメールにてお送りください。応募用紙はホームページからダウンロードできます。

詳しくは小樽文化遺産HPをご覧ください。
http://www.otarubunkaisan.jp

写真提供：小樽市総合博物館

OTARU HEART JOURNAL
小樽文化遺産ジャーナル
小樽文化遺産情報発信事業

発行日　令和2年12月6日
原稿構成　高野宏康
小樽商科大学グローカル戦略推進センター研究支援部門
地域経済研究部　学術研究員　博士（歴史民俗資料学）
協　力　小樽市総合博物館
発　行　小樽市産業港湾部観光振興室
〒047-0007　小樽市港町4番3号　TEL.0134-32-4111

※本誌は、小樽市日本遺産推進協議会が日本遺産認定を目指し申請したストーリーを、市民への周知、観光誘客を目的として再構成したものです。

2つの日本遺産のまち『心臓』のまち、そして

HOKKAIDO OTARU

KITAMAEBUNE

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～

江戸時代、北海道・東北・北陸・大阪を結ぶ西廻り航路を主に利用し、商品を売り買いしながら航海することから「動く総合商社」と形容された『北前船』。人・物・文化を運び、重要な寄港地であった小樽には北前船主が次々と進出。北海道開拓を支えたと同時に、小樽の発展の基礎をつくりました。

写真提供：小樽市総合博物館

TANTETSUKO

本邦国策を北海道に観よ！
～北の産業革命「炭鉄港」～

空知の「石炭」を基軸に、室蘭の「鉄鋼」、小樽の「港湾」、これらを繋ぐ炭鉱鉄道によって展開された北海道近代化の物語『炭鉄港（たんてつこう）』。明治維新後、国策として開拓が進められた北海道の、この「北の産業革命」によって、小樽は北海道随一の商都へと大きな飛躍を遂げていきました。

写真提供：佐藤圭樹

小樽市庁舎（昭和8年築）

小樽市公会堂（明治44年築）

小樽運河を守る会関係資料

藤森茂男作風景画

飲食店として活用された色内大通りの石蔵

認識を一般市民から行政、経済界へと広め、全国のまちづくり運動に影響を与えました。まさに「民の力」が「心臓」の鼓動を蘇らせたといえます。**「小樽運河を守る会」関係資料**（小樽市総合博物館蔵）には運動の過程が克明に記録されています。

「民の力」によるまちの再生

小樽には、明治以来、まちの発展とともに財を成した資本家たちが、**小樽市庁舎**（昭和8年築）や**小樽市公会堂**（明治44年築）を寄付するなど、「民の力」で自らまちを作り上げてきた歴史があります。運河保存運動の根底にはこの「民の力」があったと考えられます。明治以降に造られた、他に類を見ない特徴的な建築群とまちなみは、運河保存運動を経て多彩なかたちで蘇りました。金融街は、文学館や美術館、資料館に、港の倉庫群は博物館などの文化施設となり、**色内大通り・堺町通り**などの商店や石蔵、倉庫は飲食・物販店、ホテルなどに転用されています。港湾労働者たちが活力源として好んで食べた餅や、小豆や砂糖が集積したことで発達した菓子、ビジネス街が形成された大正・昭和初期に生まれた洋菓子喫茶など、豊かな食文化は、現在、ロマン溢れる歴史的な店で楽しむことができます。石炭輸送で日本の近代化を支えた手宮線は、廃線後、市民と行政が保存・活用を協議した結果、散策路となり、憩いの場として親しまれています。

散策路となった手宮線跡
／写真提供：佐藤圭樹

歴史を活かすまち・小樽の新たな鼓動

かつて、一攫千金を夢見て小樽に渡った人たちのエネルギー、そして財を成し福祉や文化を支援した小樽商人たちの「民の力」によって創られた北の商都は、運河保存運動を経て文化と観光の「心臓」に生まれ変わりました。近年、**北運河エリア**をはじめ市内各地で、世代を超え、まちの魅力に惹かれて集ってきた人たちが、小樽固有の建築群とまちなみを積極的に保存・活用しようとする取組みが始まっており、「歴史を活かすまち・小樽」の新たな鼓動を生み出しています。

石蔵を活用した蕎麦店

Story 概要

かつて小林多喜二は、小樽のまちを、北海道の「心臓」と表現しました。明治以降、港と鉄道の「大動脈」により、多数の物資と人が押し寄せ、巨大なニシン番屋、石造りの倉庫などを造っていきました。明治後期には、大手銀行や商社の支店が進出し、経済の「血液」、金融の力で北日本随一の商都に飛躍して栄華を極め、運河をはじめ近代的インフラが「骨格」としてまちを支えました。

昭和後期、小樽運河保存運動を経て、まちを愛する市民たちの「民の力」で、ロマン溢れる歴史的建造物とまちなみの魅力が再発見され、カフェなどの飲食店、博物館等の文化施設に活用されていきました。かつての商都から、文化と観光の「心臓」に生まれ変わった小樽は、国内外から訪れる人たちを魅了し続けています。

STORY Part.3

運河保存運動を経て、文化と観光の「心臓」のまちへ

運河保存運動から生まれた、歴史を活かすまちづくり

昭和後期、かつて栄華を誇った小樽は、石炭から石油への転換、港湾の市場が太平洋側へ移行する中で次第に衰退し、「心臓」の鼓動は弱まっていきました。昭和40年代には、荒廃が進んだ**小樽運河**を埋め立て、道路を建設する都市計画が決定し、有幌地区の倉庫群の取り壊しが始まりました。これに対して市民の間に、まちの発展の象徴である運河を守ろうとする運動が起こります。10年余りに渡り市中を二分する大論争の結果、都市計画を変更し、運河の半分は埋め立てられ、半分は道路と水辺の散策路になりました。その後、小樽は観光都市への道を歩みはじめ、運河や歴史的な建物はかけがえのない観光資源となりました。**藤森茂男作風景画**は埋立て前の小樽や運河の姿を描いた作品群を残しています。

運河保存運動は、運河だけでなく、多数の歴史的建造物の保存活用につながり、歴史を活かすまちづくりの